教育の広場

新聞の活用で「言語力」の育成を

―学校に社会の「鼓動」を伝えるNIEの活動から

池田知隆

子どもたちの「読解力」の低下や文字・活字離れが心配されている中で、学校などで新聞を教材として活用する「NIE（教育に新聞をNewspaper in Education＝「エヌ・アイ・イー」と読む）」の活動が静かに広がっている。社会性豊かな青少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展などを目的に掲げ、教育界と新聞界が協力して全国で展開している試みだ。インターネットの広がりで新聞は大きな転機を迎えているが、人と人をつなぎ、学校や家庭、社会の中で語り合える広場としての新聞の役割は変わらない。なによりも子どもたちの言語力の育成のために新聞の活用が求められている。

世界の鼓動を伝える新聞

NIEはいま、どのように行われているのだろうか。

今夏、高知市内で開かれた「第13回NIE（教育に新聞を）全国大会」（日本新聞教育文化財団、高知県教委主催）の様子からみてみよう。「子どもが拓くNIE　地域に根ざす学び求めて」をスローガンに開かれ、大会の初日は作家の山本一力さんの記念講演やパネルディスカッション、2日目は公開授業や分科会などが行われた。

高知市出身の山本さんは、今年還暦を迎える団塊の世代。小学6年の時、月曜の朝礼の時間に新聞記事を持ってきた担任の先生の話から切り出した。まだ戦争のつめ跡が残され、いつも身近に新聞が

あったころのことだ。戦後の日本が世界の中でどのような状況に置かれているか。戦争を体験した先生は新聞を片手に熱心に話してくれたという。

「われわれがバカな戦争をしたせいで、日本は三流国だと言われている。今はこんなだが、大人になったら日本をもっといい国にしろ。そのために勉強するのだ、と説いてくれた」

中学校3年生で高知から東京に引っ越し、高校卒業までの4年間、新聞配達をした。

「米軍宿舎に英字新聞を配っていたが、日本語の新聞と英字紙では見出しも全く違うし新聞によって中身がまったく異なることを知った。ケネディ米大統領が暗殺されたとき、販売店は大騒ぎになり、子どもながらに大変な事件が起こった、と感じながら号外を配ったことを鮮明に記憶している。あの時代の私にとって政治はとても身近だったが、そう感じたのは新聞がそばにあったからだ」

テレビやラジオと違い、新聞は理解できるまで何度も読むことができる。当時、中学、高校生にとっても政治が身近な話題だったが、それは近くに新聞があったからだと山本さんはいう。しかし、インターネットの登場で、無料で手軽にニュースが読めるようになり、新聞代を払ってまで新聞を購読する必要はないという人が増えてきた。

「インターネット上のニュースは単なる情報にすぎない。新聞の一面に大きな見出しが躍れば、重大な事件が起きていることが伝わってくる。そうした『鼓動』はインターネットからは伝わってこないが、新聞には活字がもつ『鼓動』がある。新聞記事の内容が理解できない子どもたちでも体で感じとることができる」

山本さんは「新聞のある暮らしを、ここで今一度考えたい。文化を守り、受け継いでいくために、特別なことではなく、新聞が生活のなかに当たり前のこととしてあることが大切だ」と講演を締めくくった。

使いこなすための力量を

山本さんの話は具体的で、新聞関係者にとってはうれしくなるような内容だった。だが、若い人の「活字離れ」や「新聞離れ」は深刻化している。それは、新聞産業の危機を叫ぶ前に、なによりも日本人の「言語活動」の基本に関わる問題として見過ごすことができない段階にきている。

今年3月、小、中学校の改定学習指導要領が明らかにされたが、その1番の柱になっているのは「言語活動の充実」だ。まずは国語が中心となっているが、言語活動は知的活動やコミュニケーション、感性、情緒の基盤となすものであり、各教科を貫いて行うもの、とされている。

そのために子どもたちにとって必要な「言語環境」を整えて、充実した「言語活動」を行わせなくてならない。その意味では、新聞は、情報を収集し、理解していくうえでの有力な「言語環境」を形成するものであり、有効な教材になる。

ただし、新聞は教材として作られたものではない。どう使いこなすかは、教師の力量にかかっている。パネルディスカッションの席上、文科省初等中等教育局の

海の恵み にがりを残した

はかた
伯方の塩®

※伯方の塩®は、輸入天日海塩と海水を原料に使用しています。

伯方塩業株式会社
〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目4-9
TEL(089)911-4140(代) FAX(089)923-9671
ホームページ http://www.hakatanoshio.co.jp

教科調査官、大倉泰裕さんはこう強調していた。

「NIE活動あって中身なし、では困る。記事を読ませて、感想を言わせることからもっと踏み込み、どういう力を児童・生徒に身に着けさせたいのか、そのために新聞をどう使っていくのか、（NIEでは）そこを考えることが大切です。インターネットやテレビにない新聞の魅力をどう生かすかが重要だ」

多彩な実践例を

新聞を教材として活用することは、古くから社会科や国語科を中心に行われ、NIEは発達段階に応じた取り組みができる。小学校1年生からも可能で、幼稚園などで幼児期から新聞を使って工作をするなど工夫している例もある。新聞財団のホームページを開くと、

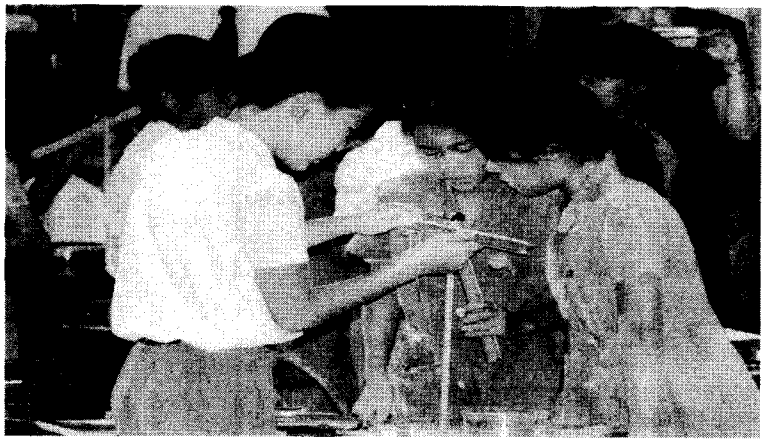
「1年生のNIEは遊び感覚で新聞が身近にあること、新聞になじむことが目的だ。紙面上での数字やカタカナ、漢字などの文字探し。さらにペットなどの動物や植物、四季、お祭り、スポーツなどの写真、またマンガも使える。問いかけたり、先生がお話してあげたりしながら、子どもが楽しんで参加できる工夫」

などを求めている。

低学年から新聞に親しみ、ステップを踏みながら高学年、中学校、高校へと発展していくのが理想的だ。NIEには、こうした新聞活用のほか、「新聞や新聞記者について学ぶ」「新聞づくりを通して学ぶ」――ことも含まれ、先生の指導のもと「朝の時間」で新聞を読むことなども行われている。さらに社会、国語、道徳、特別活動のほか、算数、外国語、技術・家庭など様々な教科で新聞が活用されている。

NIEの成果ははっきり出ている。新聞財団が05年に実施した「第4回NIE効果測定調査」によると、約8割の教師が「子どもたちが新聞を進んで読むようになった」と回答。このほか、「記事について友人や家族と話すようになった」「生き生きと学習する」「自分で調べる態度が身に付く」といった項目で、6割以上の先生が児童・生徒の学習態度の変化を指摘している。

経済協力開発機構（OECD）の「国際学習到達度調査（PISA）2000年」によっても、子どもたちの総合読解力と新聞をよく読む頻度に相関関係があることがわかっている。新聞を読む頻度が高いほど総合読解力の得点が高いという傾向は、日本だけでなく他の国においても同様にみられる。



「PISA」型読解力とNIE

この「PISA」は、国際社会のグローバル化に伴い、国際的に通用する人材を育成する教育もまた世界的観点から評価しようという経済協力開発機構のプロジェクト。高校1年生（15歳）を対象に3年に1回行い、2000年には28か国、2

003年には41か国、2006年には57か国が参加した。知識と人材の国際競争という時代を背景に、好成績の国の教育システムを参考にしようという目的があり、単なる知識だけでなく、

(1)様々なツールを効果的に活用する能力、
(2)多様な社会集団で人間関係を作る能力、
(3)自立して行動できる能力

――を調査のポイントにしている。

日本は2003年の調査で、読解力が前回の8位から14位に、数学応用力が1位から6位に低下したことにより「学力低下」が問題視され、「ゆとり教育」論争に発展した。

NIEは「新聞を通して自分が生きている社会の動きを理解し、課題を知り、解決に向けて考え、話し合い、自分の意見をまとめ、表現する」というのが基本的な取り組みの内容だ。これは「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」というPISA調査の読解力の定義とほぼ重なる。NIEもPISA型読解力も求めているのは、知識の量だけではなく、課題に直面した際にさまざまの知識を活用した自身の応用力であり、対応力であり、考える力、判断する力、表現する力だ。新聞を日常的に活用している国の子どもほどPISA型読解力が高いのは当然のことだといえる。

言語活動の充実を

改定指導要領では、総合的な学習の時間が年間35単位（週1コマ相当）削減されている。だが、文科省は「生きる力」の育成という指導要領の骨格を変わってはいない。むしろ、それを具現化するために総合的な学習の時間の趣旨も維持している。その上で、教科の知識・技能を活用するという本来的に総合的な学習の時間に期待されている学習活動を、各教科の中で充実することを求めている。

ＮＩＥは国語や社会、総合学習など各教科の中ですでに実践されている。総合的な学習の時間は削減されたものの、各教科の中で言語能力の育成を求める新指導要領の内容は、むしろＮＩＥの環境にプラスになる。要は各教科の中で、新聞活用によって言語力をどう育成するか、教師の工夫が求められているといえる。

さらにＮＩＥを通して子どもたちは、読解力だけでなく、家族との対話を深め、コミュニケーション力を身につけていることも明らかになっている。

新聞財団が04年に実施した「保護者に対するＮＩＥ調査」によると、保護者の多くが授業で新聞を活用することを評価している。新聞を使った授業について保護者の9割が「よいことだ」と回答。その理由としては「社会に関心を向けるきっかけとなる」が最も多い。新聞を読むことでコミュニケーションが増えたり、視野が広がったりするのを期待していることがうかがえる。

記事を材料に、親子で一緒に考え、話し合う。その繰り返しによって、子どもの社会への関心が自然に広まり、会話の内容も深くなり、コミュニケーション能力も上達していく。ひいては将来の職業選択や生き方にも役立っている。家庭での新聞活用が活発なフィンランド、韓国などがＰＩＳＡ型読解力の上位にあるのもうなずける。新学習指導要領で強調されている家庭、地域との連携による教育の取り組みとしてＮＩＥの活動は今後ますます評価されていくとみられる。

なぜ新聞なのか

テレビやインターネットが普及している時代に、いったいなぜ新聞なのか。そんなことをよく聞かれるが、情報技術が発達した高度な情報社会だからこそ、活字メディアである新聞を活用するＮＩＥが必要というしかない。テレビは娯楽性

と速報性、臨場感に優れ、インターネットは情報量と双方向性、利便性に優れている。だが、一方の新聞には一覧性、詳報性、解説性、記録性などの特徴がある。

高度情報社会である現代社会を生き抜いていくには、さまざまなメディアから得た情報を、自分で取捨選択しなくてはならない。インターネット、テレビなど各メディアにはそれぞれ特徴があるが、情報の命はなんといっても「信頼性」にある。比較的、信頼度が高いとされている新聞を材料に、情報を吟味し、読み比べ、考えることで自分の意見を構築すること。さらに表現力＝発信力をつちかって、情報社会を生きていくための力量を高めることが求められている。ディベート（討論）を行う場合、情報の内容をよく読み込まなくてはならないし、その読解力をつけることができるのも新聞だ。

ＮＩＥの活動に対して、新聞社は私企業であり、結局のところは、近年の新聞の売り上げの落ち込みのテコ入れ策でしかない、という冷やかな見方もある。だが、子どもたちが学校教育の中で新聞の読み方を学び、新聞報道を見抜く目を養うことはメディア・リテラシー（読み解き能力）の育成にも通じ、これからの社会を生きるうえで最も必要とされることだ。

世界新聞協会（ＷＡＮ）の調査によると、ＮＩＥは06年4月現在、世界64か国で実施され、多くの国で「民主主義を支え、よりよい市民を作る」と考えられている。新聞を読むことは、民主主義を支え、近年の大人にまで及んでいる政治に対する無関心を打破していくことにもつながるのは確かだ。

実際、学校の社会科の授業では、政治については概念的なことが中心になり、現実のホットな政治の動きについてあまり扱われない傾向がある。しかし、世界の鼓動を感じとり、社会や政治の動きを可能なかぎり正確に知ることは市民として欠かせない。ＮＩＥを、学校に世界の生の鼓動を伝え、いきいきと再生させるために活用してほしい。

NL

2008

11

CONTENTS

教育の広場

●新聞の活用で「言語力」の育成を
学校に社会の「鼓動」を伝えるＮＩＥの活動から 4

NEWS ROTARY

●再生なるか大相撲
相次ぐ不祥事で相撲協会のトップが交代 12

特別展
「没後400年木食応其－秀吉から高野山を救った僧－」 10

循環器と漢方・生薬製剤 22

素材のうまみを引き出す塩を調理に生かす 26

現代のニーズにマッチした味・包装の理想のチーズ 30

開館20周年記念特別展―京都文化博物館
「読む、見る、遊ぶ、源氏物語の世界―浮世絵から源氏意匠まで―」 34

心を未来につなごう「小さな親切」運動 54

大阪市立自然史博物館便り 57

REGULARS

女性ホルモンの神秘と効用 21

獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？ 35

あのときこんなこと 36

回虫博士の世界漫遊紀行―アブないです、その「超清潔志向脳」 42

たかが　われらが日々？ 45

なまずのひとりごと 48

どれみの鼻歌 51

どこで憩うか―温泉――おいしい紅葉の宿 58

食と健康――脳を若々しく維持するブレインフーズ②― 61

京都は優雅――京都の名水を唎き歩く② 64

ＬＩＢＲＡＲＹ 67

11月の運勢 69

編集後記 70

表紙写真　森村　進